

# 小島嶼国における教育のグローバル化とローカル性

—サモアのカリキュラムの枠組を事例として—

奥田久春

## 要 旨

南太平洋の小島嶼国のサモアは伝統を重んじる社会であり、独立以降旧宗主国のニュージーランドの教育制度から脱し、独自の教育を構築してきた。しかし一方で、開発援助に頼らざるを得ず、またニュージーランドとの関係が重視されてきた。カリキュラム開発においてもニュージーランドの影響を少なからず受けている。例えば2006年に策定されたサモアの『カリキュラム枠組』は1993年のニュージーランドの『カリキュラム枠組』と同様の構成になっている。それは「本質的なスキル」において顕著である。しかしニュージーランドからそのまま移植してきた訳ではなく、「属性」や「美的判断」などサモアの文化的な要素のあるスキルについてはサモア独自のものが見られる。また「本質的なスキル」を学習領域や「価値」と並列にするなど、むしろ現在のニュージーランドのカリキュラムの構造に近い面もある。しかしながら、キー・コンピテンシーの導入には至っていない。サモアは小島嶼国であり、国際社会との関係は切り離せない。伝統を重んじ、教育の独自性を追求しつつも、大量の移民の送り出し国であることを考えれば、ニュージーランドの教育とある程度整合性を保つ必要もある。サモアの独自性とニュージーランドの教育のバランスについて、文化的な要素については独自性を維持し、枠組みについては、ニュージーランドに合わせようとしていると考えることができまいだろうか。

## はじめに

本研究は、小島嶼国が旧宗主国や大国、更にグローバルな教育改革の潮流の影響を受けつつ、いかに独自の教育制度、教育課程を作り上げていくのかについて、南太平洋のサモア独立国（以下、サモア）を事例に考察していくことを目的としている。

小島嶼国は、矮小性、隔絶性や脆弱性、対外依存といった課題を抱えているといわれる<sup>1</sup>。植民地を経験した国であれば、旧宗主国の構築した制度の影響を受けており、また国家予算の規模や専門人材の不足から開発援助に頼らざるを得ない<sup>2</sup>。教育においてもカリキュラムの開発などが困難であることから援助の対象となり、そうした援助国の教育の影響を受けやすい。このためローカルの教育課題との齟齬も指摘されてきた<sup>3</sup>。

しかしこうした小島嶼国では国際社会の影響を受けやすい分、社会の変化に対応できる能力や資質をもった人材育成の重要性も指摘されている<sup>4</sup>。また国際社会と断絶することができない限り、むしろローカル性とグローバル化との整合性も重視されている<sup>5</sup>。そうしたバランスをどのように取るのが課題だと言えよう。

本稿で取り上げるサモアは1962年の独立以降、比較的早い段階で、教育のサモア化を実現してきた。しかしながら、その過程においてもニュージーランドなどの援助を受けてきた。そのためサモアの教育の独自性を考える上で、まずはニュージーランドがサモアのカリキュラム開発にどのような影響を

与えたかを見ていくこととしたい。特にサモアが2006年に策定した『ナショナル・カリキュラム政策枠組』（“National Curriculum Policy Framework”、以下『カリキュラム枠組』）から、身に付けるべき能力としての「本質的なスキル」（Essential Skills）を取り上げ、ニュージーランドが1993年に策定した『ニュージーランド・カリキュラム枠組』（“The New Zealand Curriculum Framework”、以下『NZカリキュラム枠組』）でも設定されていた「本質的なスキル」<sup>6</sup>と比較することで、類似性と相違点を考察していきたい。

## 1. サモアの概要

サモアは南太平洋に位置し、人口191,800人、面積が2830 km<sup>2</sup>の小島嶼国である<sup>7</sup>。国土は大きく2つの火山島（ウポル島、サバイ島）によって構成されている。ドイツの植民地となったこともあるが、第1次世界大戦後はニュージーランドの植民地となり、第2次世界大戦後に同国を施政国とする国連信託統治領となった。1962年に独立し、国家としての道を歩んできた。しかし産業としては、コブラなど農業や漁業といった第1次産業が主で、生活品の多くを輸入に頼っている。またニュージーランドが年間1000人のサモア人を移民として受け入れており、そうした送金によって国家経済が成り立っている。また国家経済に占める開発援助の割合も高く<sup>8</sup>、教育分野でもニュージーランドだけでなくオーストラリアや日本、EUなどの支援によって教育開発が行われてきた。高等教育機関としてサモア国立大学が存在するが、フィジーに本部のある広域の南太平洋大学やニュージーランド、オーストラリアの大学等で学ぶ者も多い。こうしたことから国際社会との関係は切り離すことはできず、サモア語と英語を公用語として、バイリンガル教育の政策が堅持されている<sup>9</sup>。

その一方で、サモアは大家族を基盤とした村社会によって成り立っている国である。伝統的な社会生活を重んじており、親族の長やリーダーに付与される称号を有するマタイによる村の自治、儀式も一般的に行われている。成人と子どもの関係や役割などサモア風の社会慣習、生活様式が維持されている。こうしたサモア風のことをサモア語で Faa'Samoa と呼ばれ、学校教育でも重視されている<sup>10</sup>。

## 2. サモアの教育制度とカリキュラム

サモアの教育制度は初等教育が8年間、中等教育が5年間である。もともと19世紀にニュージーランドによって公教育制度が整備され、植民地時代はニュージーランドの学校教育の中でも基礎レベルの教育内容が教えられていた<sup>11</sup>。しかし独立後はニュージーランドの影響から脱し、早い段階で独自の教育の構築に着手していった。

例えば1970年代にはオーストラリアの援助を受けつつ、初等教育のシラバス<sup>12</sup>を策定した。このときに初めてサモア語が教科として導入され、また他教科でもサモアのことが教えられるようになった。しかし中等教育については、独立後もニュージーランドのカリキュラムが用いられていた。

1995年に策定された『教育政策1995-2005』を受け、1997年から2004年にかけてオーストラリアの援助による小学校教材開発プロジェクト（PEMP I、II）が実施され、教科書に相当する教材が開発された。中等教育については5年間の教育制度を整備することに合わせ、ニュージーランドの援助で1998年から2004年にかけて中等学校の各教科のカリキュラムと教材開発が行われた。

このようにサモアでは初等教育と中等教育とで別々にカリキュラムが作成されたため、一貫したカリキュラムの枠組みが求められてきた。このため2004年から2005年に、ニュージーランドの支援<sup>13</sup>

を受けて、2006年に『カリキュラム枠組』が策定された。

### 3. サモア『カリキュラム枠組』と「本質的なスキル」

#### (1) カリキュラムの構造

この『カリキュラム枠組』は、ニュージーランドの援助を受けつつ、サモアが主体となって開発したものである。ここでサモアの独自性の一方で、ニュージーランドの影響がどのように見られるのか考察していきたい。

『カリキュラム枠組』は主にサモアの教育の目標やカリキュラムの政策上の位置づけ、カリキュラム原則・目標に続いて、「カリキュラム政策」（学習領域、カリキュラムの範囲とバランスのためのガイドライン、各教科の時間配分、言語とバイリンガル、教授・学習へのアプローチなど）、更に評価に関することやカリキュラムの計画と見直しに関することなどで構成されている。この「カリキュラム政策」の中でカリキュラムの構成要素が示されている（図1）。

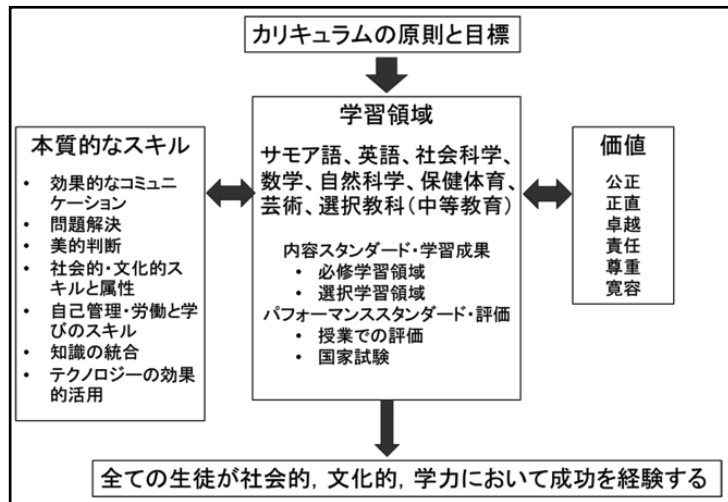


図1. 『カリキュラム枠組み』の要素と繋がり

出典：Samoa Ministry of Education, Sports and Culture, (2006), “National Curriculum Policy Framework”, p.11. をもとに筆者作成

この構成要素から分かるのは、まず、学習領域という概念が導入されていることである。この学習領域には内容スタンダードと学習成果が設定されていることから、成果に基づいたカリキュラム (Outcomes-based Curriculum) であることが分かる。この成果に基づいたカリキュラムとは、教育内容が先にあるものではなく、達成されるべき成果から教育内容を編成していくというカリキュラムで、1980年代からアメリカやオーストラリア、南アフリカなどで採用されてきた。またスタンダードとは、それぞれの学習に基準 (Standard) を設定し、どの程度まで達成できているかによって評価していくものであり、同じくオーストラリア等で用いられている。こうした国際社会で用いられているカリキュラムの要素がサモアでも導入されている。

次に、「本質的なスキル」と「価値」が並列に位置づけられていることが分かる。この「本質的なスキル」については次節で述べることとして、ここではその位置づけについて考察してみたい。まずサ

モアのカリキュラムの構成要素を、1993年の『NZカリキュラム枠組』（図2）の原則、学習領域、「本質的なスキル」、「価値」と比べてみると、ほぼ同様であることが分かる。しかし異なるのは、それぞれの位置づけである。『NZカリキュラム枠組』では、学習領域の下位に「本質的なスキル」、その下に「態度と価値」が位置づけられていたが<sup>14</sup>、前述したようにサモアの『カリキュラム枠組』では学習領域を中心に据え、その両端に「本質的なスキル」と「価値」を並列に位置づけている。『NZカリキュラム枠組』の構成をそのまま移植せず、3要素を並列させている点に違いを見ることが出来る。なおこれについては、むしろ『NZカリキュラム枠組』の改訂版である2007年の『ニュージーランド・カリキュラム』<sup>15</sup>の構成（図3）に近いといえよう。もちろんこちらは、キー・コンピテンシーを中心に据えつつ、「価値」と学習領域とが3本の柱となって構成されているが、サモアでは学習領域が中心にあって、「本質的技能」と「価値」との繋がりを示しているに過ぎない。これは、サモアでは「学習領域」に設定されたスタンダードや成果に基づいた（Outcomes-based）教育が主流であって、まだキー・コンピテンシーの導入といった議論にはなっていないからであろう。

また、「価値」についても、サモア『カリキュラム枠組』と『NZカリキュラム枠組』とほぼ同様の価値が設定されている。しかし「卓越」については、2007年の『ニュージーランド・カリキュラム』に見られるが、『NZカリキュラム枠組』にはない。

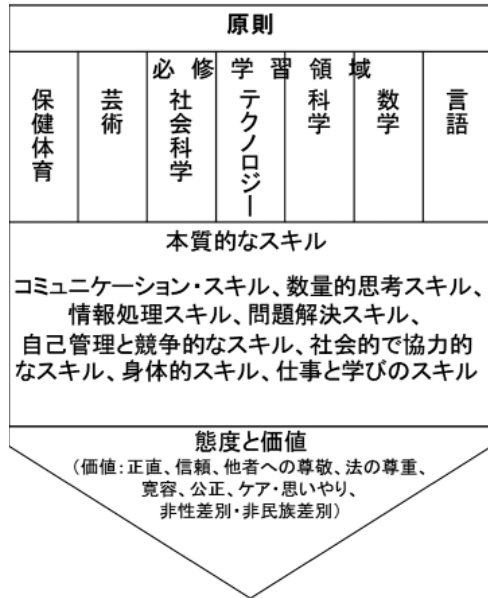


図2. 『NZカリキュラム枠組』（1993年）

出典：Ministry of Education, (1993), “The New Zealand Curriculum Framework”, p.5 より作成

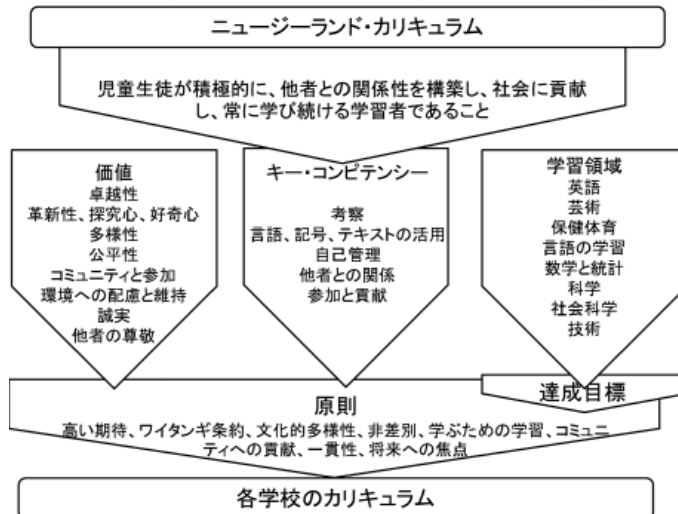


図3. 『ニュージーランド・カリキュラム』（2007年）の構成

出典：Ministry of Education, (2007), “The New Zealand Curriculum”, p.7. より、高橋（2013）<sup>16</sup>を参考に作成。

(2) 「本質的なスキル」

次に「本質的なスキル」の内容について見ていきたい。サモアの「本質的なスキル」は『カリキュラム枠組』において、「学習領域を横断し、全ての学習活動を通じて達成される学習成果」、「必修カリキュラムを超えるもので、学校教育を通じて育成される広範な技能のこと」、「全ての教室や学校行事において提供される経験の質の結果として育成され、全ての学校行事と同様に学校外の社会・文化世界において生徒に活用されるもの」、「社会に参加していくために必要とされる一般的技能（ジェネリック・スキル）・知識であり、全ての学習領域での活動を通して獲得されるもの」という説明がなされている。この「本質的なスキル」は7項目あり、内容は表1に示す通りである。

一方、『NZカリキュラム枠組』では、「本質的なスキル」を「潜在能力を高め、職業社会に参加できるようにするためのものであり、全ての生徒が必修学習領域の文脈において発達させるものである」、「(こうした)スキルが教室内だけでなく、広い世界と関連したものであることで、学校での学習が適切で有意義で役に立つものと認識される」と説明しており、サモアの「本質的なスキル」とほぼ同じと考えることができる。

ニュージーランドの「本質的なスキル」は8技能、57項目に及ぶ膨大な内容となっている(表2)。これらサモアとニュージーランドの「本質的なスキル」を比較してみると、網掛け部分などほぼ近い

表1. サモア『カリキュラム枠組』における「本質的なスキル」

効果的にコミュニケーションをとること	コミュニケーションは全ての学習の基盤となるもので、読む、書く、話す、聞くこと、視覚表現、グラフィック、非言語コミュニケーション、意味を伝えるための数字とデータの使用を含む。
問題を解決すること	探究と推論、データ収集と情報処理、創造的な解決策の提示、結果の評価を含む。問題解決には数学の概念やスキルが用いられる。
美的判断をすること	表現手段としての視覚芸術・舞台芸術を含み、対象物や経験の中に美的価値を認識することが求められる。
社会的・文化的スキルと属性を発達させること	社会的に活動し、他者と効果的に働く能力は本質的なスキルである。文脈や文化的な規範と期待を理解すること、交渉によって合意に達する能力が求められる。これにはジェンダーに関する問題を知的に理解するなど倫理的枠組みを構築することも含まれる。
自己管理し仕事や学びのスキルを発達させること	個人的、精神的に、またスポーツや学術において有益なものとするために自分で時間を管理する。全ての者が公平で尊敬されていると感じられる建設的な問題解決の方法を知る。自分の選択と行動に責任を持ち、失敗と成功から学ぶ。これには健康維持への責任も含む。
知識を統合すること	知識は学習領域において構成されているが、教育の主目的は周囲の世界を理解し、様々な分野に関連していることを理解することである。得た知識を経験や複雑で相互に関連しあう理解と結び付けられるように、教科を深く総合的に理解することが求められる。
テクノロジーを効果的に活用すること	テクノロジーには日常生活において、また特定の関心事を追究する中で用いられるモノや製品を作ったり、建設したりするスキルと知識を開発していくことが含まれる。更に電子情報にアクセスするための情報技術も含まれる。今後、情報技術はより広範に利用可能となり、情報を作り、位置づけ、保存するためにカリキュラムのあらゆる領域で使用されるようになる。

出典：Samoa Ministry of Education, Sports and Culture, (2006), “National Curriculum Policy Framework”, p.12. をもとに筆者作成。網掛けは筆者。

内容になっていることが分かる。完全に一致してはなくても、例えばニュージーランドの「数量的思考スキル」はサモアの「効果的なコミュニケーション」に一部含まれており、「身体的スキル」もサモアの「自己管理と仕事・学びのスキル」に簡略ながら含まれている。また、サモアの「知識の統合」についてもニュージーランドの「問題解決スキル」に近いものを見ることができる。

一方でニュージーランドの「本質的なスキル」では8つの項目名に全てスキルが強調されているの比べ、サモアではそれほど強調されていない。またサモアの「テクノロジーの効果的活用」が情報技術のみを指している訳でなく、いわゆるモノづくりも含めているのはサモアの特徴であろう。

表2. ニュージーランド『カリキュラム枠組』の「本質的なスキル」(抜粋)

コミュニケーション・スキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>●聞く、話す、読む、書くこと、他の適切なコミュニケーションの方法によって、自信をもってコミュニケーションを行う。●様々な文化的、言語的、社会的文脈において、情報、命令、思考、感覚を適切かつ効果的に伝え、受け取る。●メディア、聴覚・視覚的メッセージ、その他関連したリソースを識別し批判的に分析するスキルを発達させる。●問題を明確かつ論理的に説得力をもって議論する。●障がいを持つ人々のコミュニケーションも含め ICT を利用する能力をもつ。</li> </ul>
数量的思考スキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>●正確に計算する。●図、百分率などの数学的な情報を認識し、理解し、分析し、対応する。●論理や論拠を支えるための情報をまとめる。</li> </ul>
情報処理スキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>●広範囲の情報の同定、位置付け、収集、蓄積、引出し、処理をする。●情報をまとめ、分析し、統合し、評価し、引用する。</li> </ul>
問題解決スキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>●批判的、創造的、省察的、論理的に思考する。●創造性、独創性、柔軟性を訓練する。●問題を同定し、説明し、再定義する。●様々な観点から問題を分析する。●繋がりを作り、関係を構築する。●自分の考えについて調査し、探究し、生み出し、発達させる。●革新的な事や独自の考えを試してみる。●思考や解決を試み、経験や根拠に基づいた決定を行う。</li> </ul>
自己管理と競争的スキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>●家庭や日常生活において実用的なライフスキルを発達させる。●現実的な個人の目標を設定し、評価し、達成する。●時間を効果的に管理する。●イニシアティブ、コミットメント、忍耐、勇気、積極性を示す。●挑戦と変化、ストレスとコンフリクト、競争、成功と失敗に対する構造的なアプローチを発達させる。●自尊心と個人の誠実さを発達させる。●傷害や虐待から身を守り、健康と安全に責任をもつ。</li> </ul>
社会的で協力的なスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>●集団の一員として、協同での行動やその決定に責任をもつ。●社会的、文化的環境に適切に参加する。●差別的な実践や行動を適切に認識し、分析し、対応する。●高潔、信頼性、信用性、優しさまたは同情心、公正、勤勉、寛容、親切や寛大さなどによって他人に対する思いやりを見せる。●他人の幸福への責任感、環境への責任感を発達させる。●合意のために協議し、到達する能力を発達させる。●責任のある市民として民主主義社会に効果的に参加する。</li> </ul>
身体的スキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>●定期的な運動、良好な衛生、健康的な日常の食事を通して、健康を向上させる。●スポーツ、レクリエーション、文化活動の専門スキルを発達させる。●道具や資源を効果的、安全に利用する。</li> </ul>
仕事と学びのスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>●個人でも集団においても効果的に働く。●自身の学習経験、文化的背景から好みの学習スタイルを用いる。●堅実な活動習慣を発達させる。●自身の学習と活動に責任をもつ。●生涯で継続的な学習意欲をもつ。●自己評価と現実的な情報を基に職業選択を行う。</li> </ul>

出典：Ministry of Education, (1993), "The New Zealand Curriculum Framework" をもとに二宮皓等 (2004)<sup>17</sup> を参考に作成。網掛けは筆者。

しかしここで注目したいのは微細な点であるが、サモアの「社会的・文化的スキルと属性」、「文化的規範や期待」についてはニュージーランドにそうした概念が見当たらないことである。ニュージーランドでも「文化的文脈等での情報等を伝え受け取ること」（「コミュニケーション・スキル」）や「文化的環境への参加」（「社会的で協力的なスキル」）、「文化活動の専門スキル」（「身体的スキル」）、「文化的背景から好みの学習スタイル」（「仕事と学びのスキル」）といったように、文化的なことへの言及は見られるが、自身の文化的帰属性を規範という観点でスキルとしている点は、サモア独自のものである。また「美的判断」や「美的価値の認識」についてもサモアのみスキルである。こうした文化的なスキルについてはサモア独自に設定されたということであろう。

この『NZ カリキュラム枠組』では提示された項目が多岐にわたっている。こうした複雑さによって「本質的なスキル」と学習の達成目標とを関連させることが困難になっていると批判されるようになり、2000年代に入って見直しが行われるようになった。

この議論において、ニュージーランドではスキルを身につけるだけでなく、実際にそれを活用しようとする「気質（Disposition）」や態度が重視されてきた。また二文化主義でかつ多文化な状況にあるニュージーランドでは文化的な価値観の違いを避け、より普遍的なコンピテンシーが必要となってきた<sup>18</sup>。加えて一般的（ジェネリック）というだけでなく専門性とも結びつきうることが求められた。このようにスキルよりも広範な能力を包含するコンピテンシーが重視されるようになった<sup>19</sup>。更に PISA の影響から、「本質的なスキル」からキー・コンピテンシーへと切り替えるようになっていった。

### (3) 「本質的なスキル」とキー・コンピテンシー

しかしサモアでも同時期に『カリキュラム枠組』が開発されていたにも関わらず、キー・コンピテンシーの導入という議論にはならなかった。サモアとニュージーランドの「本質的なスキル」、ニュージーランドと OECD の DeSeCo のキー・コンピテンシーを比較したのが表 3 である。前節で述べたように、サモアの「本質的なスキル」はニュージーランドの「本質的なスキル」と親和性が高い。一方、キー・コンピテンシーとの繋がりが全く見られないわけではないが、サモアの「本質的なスキル」にニュージーランドや DeSeCo のコンピテンシーとしての包括的で広範な能力を見ることは難しい。

サモアは OECD 加盟国ではなく、PISA に参加している訳でもない。また「ニュージーランド・カリキュラム」が策定されている最中で影響を受ける段階にはなかったということも考えられる。サモアはニュージーランドのような二文化主義や多文化という状況ではなく、自文化の属性以外は、文化的な価値観の違いにそれほど敏感になる必要がない。このため、ニュージーランドのような文化的に普遍のコンピテンシーが求められた訳でもないであろう。

## おわりに

サモアのカリキュラムは、『NZ カリキュラム枠組』と同様の構成になっている。特にそれは「本質的なスキル」で顕著にみることができた。しかしニュージーランドからそのまま移植してきた訳ではない。各要素の位置づけも異なり、「価値」においても完全に一致していなかった。「属性」や「美的判断」など文化的な要素のあるスキルについてはサモア独自のものが見られた。また、「本質的なスキル」を学習領域や「価値」と並列にするなど、むしろ現在のニュージーランドのカリキュラムの構造に近い面もある。しかしキー・コンピテンシーそのものの影響がある訳ではない。

サモアは小島嶼国であり、ニュージーランドなど国際社会との関係は切り離せない。伝統を重んじ、

表3. サモアとNZ「本質的なスキル」、NZとDeSeCoのキー・コンピテンシーの比較

サモア「本質的なスキル」	NZ「本質的なスキル」	NZ「キー・コンピテンシー」	DeSeCoのキー・コンピテンシー (但し文化的能力はキー・コンピテンシーとしては扱われていない)	
効果的にコミュニケーションをとること	コミュニケーション・スキル	言語、記号、テキストの活用	相互作用的に道具を活用する	言語、記号の活用
	数量的思考スキル			知識や情報の活用
テクノロジーを効果的に活用すること	情報処理スキル			技術の活用
問題を解決すること	問題解決スキル	考察	反省性(考える力)(協働する力)(問題解決力)	
知識を統合すること				
自己管理し仕事や学びのスキルを発達させること	自己管理と競争的スキル	自己管理	自律的に活動する	大きな展望
	仕事と学びのスキル			人生設計と個人的プロジェクト
	身体的スキル			権利・利害・限界や要求の表明
社会的・文化的スキルと属性を発達させること	社会的で協力的なスキル	他者との関係	異質な集団で交流する	問題解決力
		参加と貢献		人間関係力
美的判断をすること			文化的能力	協働する力
				審美的能力

出典：D.S. ライチェン等(2006)及び松尾(2013)<sup>20</sup>を参考にして、筆者作成。

教育の独自性を追求しつつも、大量の移民の送り出し国であることを考えれば、ニュージーランドの教育とある程度整合性を持つ必要もあると考えられる。こうしたバランスの取り方について、カリキュラムの枠組みはニュージーランドを参考にしつつ、しかし文化的な要素についてはサモア独自のものを維持しようとしていると考えられるのではないだろうか。これについて今後は、更に「本質的なスキル」と各学習領域の内容や学習成果との関係について見ていくことで補足していく必要がある。

最後に、サモアが今後、ニュージーランドのように「本質的なスキル」からキー・コンピテンシーへの導入を図るとは考えにくい。『カリキュラム枠組』をもとにした各教科の『カリキュラムステートメント』が2011年に策定され、ようやく定着してきたところである。しかし未来永劫同じカリキュラムでいる訳ではない。今後どういった形でカリキュラム改革が行われるのか見ていく必要があろう。

## 註

- 1 Atchoarena, D., (1993), "Educational Strategies for Small Island States", UNESCO: International Institute for Educational Planning, Paris.
- 2 Bray, M. & S. Packer (eds.), (1993), "Education in Small States: Concepts, challenges and strategies", Oxford: Pergamon Press.
- 3 Coxon, E., K., Munce, (2008), 'The global education agenda and the delivery of aid to Pacific education', "Comparative Education", Vol. 44, Issue 2, pp.147-165.



- 4 Bacchus, M., (2008), 'The education challenges facing small nation states in the increasingly competitive global economy of the twenty-first century', "Comparative Education", Vol.44-2, pp.127-145.
- 5 Pumau P., & B., Teasdale (ed.), (2005), 'Educational Planning in the Pacific Principles and Guidelines', "The PRIDE Project Pacific Education Series No.1", The University of the South Pacific.
- 6 Essential Skills について、様々な日本語訳がある。例えば中村は「必須スキル」と訳しており（中村浩子（2010）「ニュージーランドの教育制度における多様性と質保証」日本比較教育学会『比較教育学研究』第41号、78-96頁）、高橋は「身につけるべき能力」と訳している（高橋望（2014）「ニュージーランドの学校教育カリキュラムに関する考察」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第63巻、181-190頁）。本稿では Essential Skill が全ての生徒が身につけるべき必須の能力であることは承知しながらも、学校教育や学習領域を超えるものという点を重視して「本質的なスキル」と訳した。
- 7 外務省 HP, <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nz/data.html> (2016年11月12日)
- 8 GNI が8億ドルに対し日本、オーストラリア、ニュージーランドの援助だけで7千6百万ドル（外務省 HP, <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nz/data.html>, 2016年11月12日）。
- 9 Ministry of Education, Sports and Culture, (1995), "Western Samoa Education Policies 1995-2005"
- 10 Ministry of Education, Sports and Culture, (2006), "Ministry of Education Sports and Culture Strategic Policies and Plan (2006-2015)".
- 11 Coxon, E., (2007), 'Schooling in Samoa', Craig, C., & S., Geoffrey (eds.), "Going to School in Oceania", Greenwood Press, pp.263-314.
- 12 スコープとシーケンスを示したもの。
- 13 Samoa Ministry of Finance Aid Coordination-Management Division, (2005) "Samoa Partnerships for Development 2004-2005", Policy, Planning and Research Division.
- 14 中村（2010）前掲書。
- 15 Ministry of Education, (2007), "New Zealand Curriculum"
- 16 高橋（2014）前掲書
- 17 二宮皓・中矢礼美・下村智子・佐藤仁（2004）「Competency-based Curriculum に関する比較研究」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』第13号、45-59頁。
- 18 中村（2010）前掲書。
- 19 Brewerton, M., (2004), "Reframing the Essential Skills Implications of the OECD, Defining and Selecting Key Competencies Project, A background paper". [http://www.tki.org.nz/r/nzcurriculum/whats\\_happening\\_e.php](http://www.tki.org.nz/r/nzcurriculum/whats_happening_e.php) (2016年11月12日)
- 20 D.S. ライチェン・L.H. サルガニク編、立田慶彦監訳（2006）『キー・コンピテンシー—国際学力の標準化をめざして—』明石書店。松尾知明（2013）「諸外国の教育動向と資質・能力」国立教育政策研究所プロジェクト研究「教育課程の編成に関する基礎的研究」編『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書6 諸外国の教育課程と資質・能力—重視する資質・能力に焦点を当てて—』国立教育政策研究所、153-154頁。

# **A Study of Globalization and Locality in Education in a Small Island State**

– A Case Study of Samoa Curriculum Framework –

Hisaharu OKUDA

## **Abstract**

Samoa, a small island country in the South Pacific, is a tradition-oriented society, and has sought to break away from the educational system of New Zealand to build its own education since independence in 1962. On the other hand, however, Samoa has had to rely on some kinds of development assistances, and the relationship with New Zealand has been emphasized. Samoa received considerable influences from New Zealand in curriculum development. For example, Samoa's "National Curriculum Policy Framework" developed in 2006 has the similar structure to the "New Zealand Curriculum Framework" developed in 1993. The similarities can be observed in "essential skills". However, the curriculum was not transplanted from New Zealand as it is. Samoa's uniqueness can be seen, for example, in Samoa's cultural skills, such as "attributes" and "aesthetic judgment". The structure is also close to the current New Zealand curriculum, such as "essential skills", "learning areas" and "value". However, the curriculum of key competencies was not introduced. Samoa is a small island country and its relationships with the international communities cannot be ignored. While pursuing the uniqueness and tradition of Samoan education, Samoa needs to align with New Zealand education. Samoa is a country sending a large number of immigrants to New Zealand. Regarding the balance between Samoa's uniqueness and New Zealand's education, Samoa is maintaining their identity in cultural elements and trying to align with the framework of New Zealand curriculum.